Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-09

神戸大学「震災文庫」の活動と資料保存問題の課題

稲葉，洋子

(Citation)
阪神・淡路大震災にかかわる史料保存活動の記録 ： その時何を考え、行動したのか:38-43

(Issue Date)
1997-10

(Resource Type)
book part

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90003383

神戸大学「震災文庫」の活動と資料保存問題の課題

神戸大学附属図書館情報管理課情報管理第一掛

1．はじめに
2．震災関係資料の収集について
3．資料の公開と保存について
4．「震災文庫」の動きと課題

１．はじめに

神戸大学附属図書館「震災文庫」では平成９年４月末現在９，０００タイトルにおよぶ阪神・淡路大震災関係資料を収集、整理のうえ、一般公開をしている。総数で３万点以上にのぼるコレクションとなっている。

平成７年１月１７日未明に起きた兵庫県南部地震によって阪神間では大学を始めとして多くの教育機関で、人的にも物的にも甚大な被害を被った。神戸大学も例外ではなく、３９名の学生、２名の教職員の尊い命が犠牲となり、キャンパスが約１０ケ月間避難所となった。国立大学間では震災１週間後には全国的に協力体制がとられ、避難あるいは帰郷している学生等に対する講義聴講や図書館の利用・貸出に関して特別措置が取られた。また、大阪大学や岡山大学で入学試験が受けられる協力体制が取られた。図書館の復旧についても全国の大学図書館から支援の申し出があり、神戸大学では一番被害のひどかった国際・教養系図書室の復旧に１１大学から職員の応援を頂いた。

平成７年４月、図書館では震災関連資料を網羅的に集めることと集まった資料を一般公開することが決定された。復旧から復興、そして防災への基礎資料として役立てて欲しい、研究者だけでなく一般市民の方々にも利用して頂きたいという図書館の熱い願いであった。この大学図書館の一般公開ということが一般市民や企業の方々から「震災文庫」への賛同や協力を得ることができた大きな要因であるとも考えている。

しかし収集、公開、保存、このどの業務をとっても大学図書館として始めて体験することが多く、試行錯誤の連続であった。一度決定したことを途中で変更を余儀なくされることも数多くあった。今回、この「震災文庫」の活動の経緯を明らかにすることによってこれからの資料の保存に少しでも参考になればと思う。

２．震災関係資料の収集について

まず、当館が「阪神・淡路大震災関係資料」として収集している資料は平成７年１月１７日の兵庫県南部地震以降にうまれた震災関係の資料である。書籍や雑誌だけでなく、地図、ビデオ、CD-ROM、チラシ、レジュメ、ポスターからカセットテープやフロッピィ・ディスク等、形態にかかわらず網羅的に収集している。

収集の第一歩は平成７年４月下旬、学術情報センターのデータベースの検索、そして書店を通じて取次のデータベース検索結果を入手して図書を購入することから始めた。しかし、市販されているものより流通ルートにのらない資料の方が多く、またその情報もなかなか入手しにくい。５月連休明けからは全国紙と地方紙の記事から震災関係の記事を拾い出す作業にかかった。毎日の記事を拾いながら、片方では地震当日まで遡っていく。この毎日の新聞のチェックで拾い出した記事をもとに文書で寄贈依頼をしている。

現在は新刊情報や新聞記事のチェック以外に各種国内外のデータベースや官公庁の政策情報誌の検索も定期的に行い、資料情報の収集源にしている。

３．資料の公開と保存について

収集を開始して約２ケ月たった６月半ばには約３００タイトルの資料が集まっていた。これらの資料を出来るだけ早く公開したい、またこんな資料でも震災資料になるんだということを知ってもらいたいという思いからデータベースの作成を始めた。そしてそのデータを出来るだけ多くの方々に見ていただくために震災以降急激に広まりはじめたインターネットを利用することにした。７月初め、すでに公開していた附属図書館のホームページに「収集速報リスト」としてのせた。

リストの公開を開始するとともに大学の内外にポスターを貼ったり、図書館雑誌で広報をしたり、新聞・ラジオ等のメディアに取り上げてもらったりと今までの大学図書館の行動範囲を越えて積極的に呼びかけを始めた。これは資料がいわゆる灰色文献といわれる流通市場にのっていないものがほとんどのため、図書館にじっとしていても集まらない、自らが収集と公開を訴えなければ集まらないためであった。また、兵庫県や神戸市、神戸商工会議所や阪神大震災地元ＮＧＯ救援連絡会議事務所等に出掛け、資料収集の協力を要請してまわった。

また、資料が集まってくるのに伴い、資料の整理方法を検討しはじめた。書籍の整理は図書館の通常の業務であるが、困ったのはチラシやパンフレット類、大型の地図、そして継続して出されている広報紙類である。一般の人にも閲覧しやすく複写しやすい、そして保存が可能なこと、これらの条件を満たしていくにはどうすればよいかを検討していった。現在、当「文庫」では一枚もの資料はハードのカードケースに収め、キャビネットまたは専用の什器を作成して保存している。また、広報類は保存のためと出し入れをしなくても複写が可能なようにクリアーファイルを利用して広げた状態で収納している。地図やポスター等、カードケースに納まらない大型の資料は脱酸処理をした後エンキャプスレーターという機械で保存加工(1) をしている。エンキャプスレーターとは一枚もの紙資料を２～５ミルのフィルムの間に挟み込み、４辺を超音波で封入する保存処理機械である。日本では両面テープで接着する方法が一般的であるが、この機械はＮＧＯが震災資料保存のためアメリカから初導入したものである。

この他にレジュメや抜刷等の厚みのない資料の保護のため表紙部分がクリアーな接着剤付表紙に挟んで専用機械で製本をしている。厚みが０～９㎜までの表紙が揃っており、機械もコンパクトで操作が簡単なため表紙が傷みやすい手記や文集、雑誌にも使用している。この処理の難点は背文字が隠れてしまうことである。これを補うためタイトルを打ち出して張りつけているがこれが思いのほか時間と手間を取られ大変な作業になっている。可能ならば背部分まで透明な、あるいは全体が透明で接着できる製本材料はないものかと思う。

平成７年１０月には約１８００タイトル、複本や継続物の数をいれると３０００点にのぼる資料が集まっていた。資料の約７～８割は寄贈によるものである。このうち整理がすんだ約１０００タイトルを１０月３０日から一般公開を始めた。インターネットで流して

いた「収集速報リスト」も公開を前に作成した「震災文庫」のホームページ(2) に移し、リストだけでなく、検索機能を付け加えた。

インターネットで検索機能を設けた理由はひとえに震災資料の特異性にある。通常図書館では資料を閲覧にまわす前に分類をしたり目録を作成する作業がある。しかし、今回の資料全体を眺めるとシンポジウムのレジュメや抜刷あるいはチラシのように出版者や著者もはっきりしないだけでなく、多くはタイトルもない資料が多い。

現在、日本のすべての国立大学図書館は東京にある学術情報センターのホスト・コンピュータに共同目録（NACSIS-CAT) (3) を作成している。これは共通の入力基準のもとに全国の大学図書館がオンラインで総合目録データベースを形成するシステムである。しかし、「震災文庫」の資料はこの基準に該当しないものが多く、目録担当者をずいぶんと悩ませ時間をとられた。結局、整理を迅速にするため学術情報センターに目録作成するものとしないものにはっきりと分けることにした。しかし、これとは別に形態、内容、厚みに関係なく同じレベルで検索したり、タイトルがハッキリしないチラシ１枚でもそこに書かれている言葉から検索できることが必要である。このために作られたのが「震災文庫」の検索システムである。利用者が遠隔地でもあらかじめ必要な資料を検索することが可能であり、また検索した結果をプリントアウトして参考資料にすることもできるためインターネットへの接続は１ケ月平均４０００回を越えて利用されている。

また、コンピュータを使わない利用者のために冊子体の分類目録を作成して「震災文庫」のコーナーに設置している。これはインターネットのデータを１ケ月に約２回更新しているが、そのつどプリントアウトして作成している。パーソナル・コンピュータやインターネットの普及は著しいが誰でも使えるものではない。「震災文庫」の利用をみていると書架で直接資料を手にとって探す人も多く、一般利用者だけでなく研究者でも自由に使いこなしている人はまだまだ少ないのが現状である。

４．「震災文庫」の動きと課題

一般公開を始めて１年半が過ぎた。この間もアンケートで寄せられる利用者の希望等を参考に整理方法を変更したり、「震災文庫」のホームページを改良していった。

まず、海外や外国語の資料だけを検索したい利用者のために日本語以外の資料を言語別に検索できるようにした。また、前述したように形態にかかわらず一覧できるようにしたが利用者から図書だけ検索したいという要求が結構多くあったため「図書扱い」のものだけ見ることができるようにした。

また、最近写真のデジタル化が普及してきている。当館でも地震直後、６つある館（室）の被災状況を撮影し、保存のためＰｈｏｔｏ－ＣＤに落とし「震災文庫」で利用できるようにしていた。この貴重な図書館の被災写真を図書館のみならず、公共機関や自宅での防災に役立てて頂こうと平成８年７月からインターネットで画像提供を始めた。

資料収集のために新聞は非常に役立つ情報源であったし、現在もそうである。しかし、

地元神戸と東京ではやはり記事の内容や量が当初から異なっていたし時間と共にその差は極端になっており、これが今、温度差という言葉で話題になっている。現在、当館では新聞は保管場所の関係もあり縮刷版しか保存していない。しかし、地震直後からの状況を後々見直すためには地元の新聞の保存が必要ではないかという判断のもと、平成７年１月１７日から平成８年３月３１日まで図書館に配達された新聞をそのまま製本保存して利用してもらうことにした。ただ、この作業ははじめ考えていたよりずっと困難を伴った。まず、当図書館がある神戸市灘区は激震地区であり、ほとんどの新聞が地震直後から数日、長いものは２週間近く配達されていなかった。この欠号分を補うため、大学と同じ区域に住む職員で直後の新聞を保存している人に協力してもらったり、新聞社のコピーサービスを利用した。また、公共図書館が新聞を処分する時に補充してもらったものもある。

新聞社でも地方版が閲覧または保存されているところは少なく、データベース化されているものでも検索してみると著作権の関係で全文が読めなかっりたりする。公共図書館でも中央図書館だけのところが多い。「震災文庫」では全国紙、地方紙、英文紙あわせて８紙を製本保存した。ただ、将来を考えるとマイクロフォーム化やＣＤ－ＲＯＭへの保存を検討すべきであると思う。

写真資料のデジタル化は今回さまざまな機関から話題になっており、市販されている資料も多くなってきた。当「震災文庫」では市民の方からネガが借用できるものはネガから、またネガのないものはスキャナーでデジタル保存を開始している。震災直後の写真だけでなく、その後の復興過程を残す定点観測の写真収集にも力を入れている。

現在は情報手段の過渡期である。資料の形態も様々である。そして一部の研究者だけではなく一般の人がＣＤ－ＲＯＭ等の電子資料を作成する時代である。このため、利用者も様々な要求をもって来館する。データをフロッピィ・ディスクに落としたりすることは当たり前であり、電子メールで膨大なデータを送信してほしいという希望にも対応している。被災地で人々が必要とした情報は日々変化していったし、形態も変わっていった。それらの変化がどういうふうに被災地で効果を発したか、再度このような被害を大都市が受けた場合、一番有効な情報手段は何か、いろいろな分析がこれからも必要である。この分析をするためにも可能な限りの資料を収集する必要がある。

しかし、一般市民の方々が積極的に情報をうみだしてきているのに対して、情報（資料）を保存する機関や総合的に利用できる機関が存在しない。国会図書館は納本制度のもと、今回の震災資料についても多くの資料を所蔵している。しかし、それは図書に限定され、チラシやパンフレット類、また広報紙類までは収集しない方針を示している。地元行政機関でも震災資料の収集、保存をめぐって博物館の新設や文書館の役割等、いろいろな問題が話題になってはいるがなかなか進んでいないようである。

７０年前におこった関東大震災、この関係資料については現在、東京都公文書館と東京市政調査会市政専門図書館(4) が主に所蔵している。特に市政専門図書館の方は目録をみると現在も収集を継続している。今回の阪神大震災の資料は当図書館をはじめ、県下にあ

る兵庫県立図書館、神戸市立図書館や各市町立の図書館そして企業の資料室などが「文庫」や、通常の蔵書に組み込んだ状態で収集しているが、はたして７０年後までどの機関が継続することができるだろうか。

さまざまな被害状況を検証し、復旧から復興の過程を見つめなおす資料を提供する、そしてそれらの研究成果まで網羅的に収集して公開していこうとすると長期的な視野で収集・整理・公開を考える必要がある。震災３年目に入り資料収集・保存の継続と共に、常に新しいデータを一般公開しながら利用を促進していく永続的な機関を考える時期に来ているのではないだろうか。

＜注ならびに参考文献＞

1) 坂本　勇「阪神淡路大震災から１年」『びぶろす』Vol.47, No.3, 1996, p.13-16

2) 「震災文庫」ホームページ： http://www.lib.kobe-u.ac.jp/eqb

3) 学術情報センター：目録所在情報サービス(NACSIS-CAT)

学術情報センターは文部省が昭和６１年４月に設置した大学共同利用機関であり、NACSIS-CAT はオンライン・ネットワーク方式により総合目録データベース（図書・学術雑誌）を形成するシステムで、平成９年４月現在５００をこえる全国の国公私立大学、短大、高専の図書館や公共図書館等が参加している。

平成９年４月からは目録所在情報のインターネット・サービスが開始されている。

ホームページ：http://www.nacsis.ac.jp/nacsis.index.html

検索サービス：http://webcat.nacsis.ac.jp/

4) 東京市政調査会市政専門図書館「関東大震災に関する文献目録　図書編、雑誌編」

『都市問題』第 86 巻第 9 号, 1995 年 9 月号

（稲葉　洋子）